

「観測史上初」の異常気象が多発。万全の備えが最低限の備えです。

8月号



Vol. 036

昭和肥料ニュース FAX版

今年も異常気象です。災害級の大雨&過日照と記録的猛暑とが鮮明に分かれ荒れています。8月は出穂～登熟の大切な期間でもあり、とても心配です。水害に対しては個人で実行できる対策は少ないのですが、高温障害対策ならば個人でできる対策の研究が進んでいます。来年へ向けた提案時の参考のために振り返ってみてください。

水稻の高温障害対策

【高温障害の症状】

高温障害は「白未熟粒の多発」「胴割れ粒の多発」として現れます。低日照や夜温上昇も重なると「粒経低下（ひどいと中身が無い）」も助長します。

【高温障害が出やすい条件、対策】

同じ地域でも、平年並の収量維持～2俵落ちでガックリ、など差が出ます。この違いをよく観察した結果、以下のことが分かって来ました。

- ①作土深の確保が有効（15cm程度は欲しい、作土10cm程度は要注意！）
- ②栽植密度は少なめのほうが安全（坪50～60株が乳白発生少ない傾向）
※福井県農試の結果から50株までは、70株との比較で減収にはならないようです
- ③ケイ酸・鉄の施用が有効（専用資材を使用する 弊社品をオススメください）
- ④穂肥の適正施用の実施は必要（一発肥料だけに頼らない 窒素補給する）
- ⑤出穂～20日後は低温にする水管理が有効（かけ流し、夕方の水替え等）
※田植時期を工夫して出穂時期が最酷暑期にならないようにする栽培管理も有効

高温対策の骨子として・・・

- ★白未熟粒は登熟不足が原因 葉と根の能力維持が対策が有効 [上記①～④]
- ★胴割れ粒は出穂期～登熟初中期の高温（日平均27℃以上）で多発 [上記⑤]
- ★耐暑性がある品種の導入も検討（地域性・市場性を考慮し可能なら選択する）

肥料価格高騰！「稲は地力で作る」の原則に帰る

一発肥料の高騰が今後も続く気配です。貴重なNPKを無駄なく使うためには、根の活力維持が不可欠です。そのための土づくりは、今後は「手間」「時間」をかけることがコストを抑える面からも不可欠です。

具体的には①秋の収穫後から年内の「秋起こしの実施」。気候的に無理な地域は融雪前の土壤改良材の散布（弊社製品は融雪効果もあります）②深耕プラウ、深耕ロータリーでの「底土栄養の再利用」（倒伏リクスも高まるため、硫酸カルシウム、ケイ酸資材の使用を推奨）③堆肥、緑肥、有機肥料の「事前施用」（分解、地力化のため作付けの2ヶ月以上前に処理）等をご検討ください。

なお、ドローンによる適期追肥が可能な方は、窒素以外はシッカリ基肥施用することをお忘れなく。（土壤の栄養バランスに注意ください）